The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バンバラ語の「形容詞」の特徴について
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2014, 25, p. 130-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72985
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

バンバラ語の「形容詞」の特徴について

小森　淳子

0. はじめに

小森（2012）ではヨルバ語とバントゥ諸語を例に、アフリカ諸語の「形容詞」について考察した。アフリカ諸語の一大特徴は「形容詞の欠如にある」（清水 1988:350）と言われるように、アフリカ諸語において形容詞というカテゴリーは認められにくく、一般に形容詞が表わすと考えられる性質や状態は動詞や名詞で表わされる。

ヨルバ語では自動詞の一群の中に事物の性質や状態を表す語が含まれており、「その花は赤い」というような叙述用法においては動詞と同じ振る舞いをする。名詞を修飾する場合は、それらの動詞から派生した動名詞形が用いられる。一方、バントゥ諸語では「名詞クラス」と呼ばれる接頭辞による名詞の分類があり、「形容詞」は修飾される名詞と同じ接頭辞をとるので、形態的には名詞と同じ形になる。それは印欧諸語において形容詞が名詞と同じ活用をし、名詞と同類に分類できることと似ている（松本 2006）。印欧諸語における叙述用法が The flower is red. のように Be 動詞を用いるコピュラ文であるように、バントゥ諸語における叙述用法もコピュラ文を用いるのが一般的である。

しかし、Dixon(2004) が述べているように、「どの人間言語にも『形容詞』という独自の語類を認めることができる」という観点からみれば、「形容詞」というカテゴリーに入る語類を見出すことはできる。ヨルバ語では修飾用法にしか用いられないいくつかの語をそのカテゴリーに入れることは可能である。また、バントゥ諸語では被修飾名詞と同じ接頭辞をとる、限られた数の「形容詞語幹」をその語類に分類することも可能である。いずれの語類も語源的には動詞から派生したものが中心となっている(Schadeberg 2003: 81, 150)。

本稿では、アフリカ諸語の「形容詞」についての考察をさらに進めるために、バンバラ語[1]の「形容詞」について見ていきたい。バンバラ語ではヨルバ語と同じように、形容詞

---

[1] バンバラ語は話者たちによって Bamanankan と呼ばれる言語で、ニジェール・コンゴ語族のマンデ語派に属する。マリ共和国南部を中心に共通語としても広く用いられており、話者数は 400 万人以上と推定される（Ethnologue による。http://www.ethnologue.com/）。マリの「国語」として指定されている 13 言語のうち最大で、正書法が確立され、マスメディアでも用いられている。本稿のバン

的な意味を表わす一群の動詞が存在するが、それらは一般的な動詞とは異なる統語標識をとり、特別なカテゴリーをなしているとみることができる。また、名詞を修飾する場合は、ヨルバ語のように動詞から派生させた形を用いるのが一般的であるが、派生させない形を用いる場合もある。以下にまず、バンバラ語の統語にとって重要な助動詞と補助詞について概観し、それらを踏まえて「形容詞」の特徴についてみていく。

1. 助動詞と補助詞

バンバラ語の基本語順は、主語（S）目的語（O）動詞（V）である[2)]が、主語の後ろに、動詞のアスペクト・ムードや否定を表わす語が現れる。これをここでは「助動詞」と呼ぶ。動詞を伴わず、助動詞が単独で現れる場合もある。それは、後述する「断定」や「同定」を表わす助動詞である。また、助動詞と共起する形でしか現れない小詞が一つあるが、これは「補助詞」と呼ぶ。補助詞は「過去」を表わす tun という語である。言い換えれば、補助詞 tun を伴うことができるものを助動詞ということができる。バンバラ語の形容詞について考察するとき、助動詞が一つの指標となる。形容詞だけと共起する助動詞があるからである。以下にまず、バンバラ語の助動詞を順に例文とともにみていく。その際、「過去」を表わす補助詞 tun を伴う例も共にあげていく[3)]。

① don　　「断定」を表わす助動詞。動詞を伴わず、単独で現れる。

(1)a.　misi　don　　「牛です」
　　牛　　断定

バラ語については神戸大学に留学中のマリ人マカン・サコ氏（20 歳代、男性）に調査協力いただいた。サコ氏はマリのバマコ出身でバンバラ語とフランス語のバイリンガルである。

2) ＳＯＶ語順はマンデ語派の特徴であるが、ＳＶＯ語順が優勢であるニジェール・コンゴ語族の中では少数派である。典型的なＳＯＶ語順の言語がそうであるように、バンバラ語でも後置詞を用いるが、少数の前置詞も存在する。

3) バンバラ語の表記は正書法に従う。正書法の表記はほぼ音声記号に沿っている。口母音 i, e, ɛ, a, ɔ, o, u（口母音にはそれぞれ長母音があり、同じ母音を 2 つ並べて表わす）。鼻母音 in [ĩ] , en [ɛ̃], ɛn [ɛ̃], an [ã], ɔn [ɔ̃], on [õ], un [ũ]　子音 b, c [ʧ], d, f, g, h, j [ʤ], k, l, m, n, ɲ, p, r, s, ʃ, t, w, y [j], z　語単位で H か L のトーンをもち、トーンによって区別される語の対もある（例：só「家」sò「馬」）が、正書法ではトーンが記されていないことが多いので、本稿でもトーン表記は省略する。

略号：　Pst 過去、VN 動名詞化接辞、Prf 完了、N.Prf 完了の否定、Fut 未来、N.Fut 未来の否定、Pp 後置詞、Pred 叙述、N.Pred 叙述の否定。

b. misi tun don 「牛でした」

牛 Pst 断定

(2)a. a sigi-len don yiri kɔrɔ 「彼は木の下に座っている」

彼 座る-VN 断定 木 下

b. a sigi-len tun don yiri kɔrɔ 「彼は木の下に座っていた」

彼 座る-VN Pst 断定 木 下

② ye ～ ye 「同定」を表わす断続形態素の助動詞。動詞を伴わない。

(3)a. n ye dɔgɔtɔrɔ ye 「私は医者です」

私 同定 医者 同定

b. n tun ye dɔgɔtɔrɔ ye 「私は医者でした」

私 Pst 同定 医者 同定

③ bɛ 「存在」を表わす助動詞。動詞を伴わず単独で現れると「存在」を表わす。動詞と共起すると「未完了相」を表わす。文脈によって、動詞の「現在」の状態や「習慣」、近い「未来」などを表わす。

(4)a. sigilan bɛ yan 「椅子はここにある」

椅子 存在 ここ

b. sigilan tun bɛ yan 「椅子はここにあった」

椅子 Pst 存在 ここ

c. n bɛ bamanankan kalan 「私はバンバラ語を勉強している」

私 存在 バンバラ語 学ぶ

d. n tun bɛ bamanankan kalan 「私はバンバラ語を勉強していた」

私 Pst 存在 バンバラ語 学ぶ

e. musa bɛ baara kɛ sini 「ムサは明日仕事をする」

ムサ 存在 仕事 する 明日

④　tɛ　　「否定」を表わす助動詞。上にみた助動詞 don、bɛ、ならびに ye ～ ye の前部要素と交替して現れる。補助詞 tun を伴うと過去の否定を表わす。

＜断定の否定＞

(5)a.　misi　tɛ　　「牛ではない」　cf. (1a)

　　牛　否定

　b.　misi　tun　tɛ　　「牛ではなかった」

　　牛　Pst　否定

＜存在の否定＞

(6)a.　sigilan　tɛ　yan　　「椅子はここにない」　cf. (4a)

　　椅子　否定　ここ

　b.　sigilan　tun　tɛ　yan　　「椅子はここになかった」

　　椅子　Pst　否定　ここ

＜同定の否定＞

(7)a.　n　tɛ　dɔgɔtɔrɔ　ye　　「私は医者でない」　cf. (3a)

　　私　否定　医者　同定

　b.　n　tun　tɛ　dɔgɔtɔrɔ　ye　　「私は医者でなかった」

　　私　Pst　否定　医者　同定

⑤　ye / -ra　　「完了」を表わす助動詞。他動詞の場合は目的語の前に ye がおかれ、自動詞の場合は動詞に -ra が接尾辞としてつく[4)]。

＜他動詞の例＞

(8)a.　u　ye　basi　dumu　　「彼らはクスクスを食べた」

　　彼ら　Prf　クスクス　食べる

[4)] -ra は動詞によって音韻変化する。鼻音をもつ動詞では -na、 l, r をもつ動詞では -la になる。例：taa「行く」＞ taa-ra「行った」、sa「死ぬ」＞ sa-ra「死んだ」、sɔn「同意する」＞ sɔn-na「同意した」、na「来る」＞ na-na「来た」、kuma「話す」＞ kuma-na「話した」、boli「走る」＞ boli-la「走った」、wuli「立つ」＞ wuli-la「立った」。

b. u tun ye basi dumu 「彼らはクスクスを食べてしまっていた」
彼ら Pst Prf クスクス 食べる （過去完了）

＜自動詞の例＞

(9)a. u taa-ra Sɛnɛgali 「彼らはセネガルへ行った」
彼ら 行く-Prf セネガル

b. u tun taa-ra Sɛnɛgali 「彼らはセネガルへ行ってしまっていた」
彼ら Pst 行く-Prf セネガル （過去完了）

「完了」の助動詞は完了した事態を表わすが、(8a)や(9a)の文は、kunun「昨日」などの副詞と共起して「過去」を表わすこともできる。

⑥ ma 完了の「否定」を表わす助動詞。上に見た「完了」の助動詞 ye / -ra と交替して現れる（自動詞の場合も ma は動詞の前にくる）。

(10)a. u ma basi dumu 「彼らはクスクスを食べていない」 cf. (8a)
彼ら N.Prf クスクス 食べる

b. u tun ma basi dumu 「彼らはクスクスを食べていなかった」cf. (8b)
彼ら Pst N.Prf クスクス 食べる （過去完了の否定）

(11)a. u ma taa Sɛnɛgali 「彼らはセネガルへ行っていない」 cf. (9a)
彼ら N.Prf 行く セネガル

b. u tun ma taa Sɛnɛgali 「彼らはセネガルへ行っていなかった」cf. (9b)
彼ら Pst N.Prf 行く セネガル （過去完了の否定）

⑦ na / bɛna 「未来」を表わす助動詞。na は動詞 na「来る」が文法化したものであり、bɛna は③でみた「存在」の助動詞 bɛ が na についた形である。na も bɛna もどちらも「未来」を表わすが、bɛna の方が確実性が低く、遠い未来を表わすようである（Fonana& Traoré 2003:188)。否定の助動詞は tɛna という形のみである。

(12)a. umu na/ bɛna taa sugu la 「ウムは市場に行くだろ」
ウム Fut 行く 市場 Pp

b. umu tɛna taa sugu la 「ウムは市場に行かないだろう」
ウム N.Fut 行く 市場 Pp

未来の助動詞に補助詞 tun がつくと、実現しなかった過去の事象を推量して、「するはずだった」という意味になる。

(13)a. umu tun na/ bɛna taa sugu la 「ウムは市場に行くはずだった」
ウム Pst Fut 行く 市場 Pp （しかし、行かなかった）

b. umu tun tɛna taa sugu la 「ウムは市場に行かないはずだった」
ウム Pst N.Fut 行く 市場 Pp （しかし、行った）

以上がバンバラ語の助動詞と補助詞の例であるが、形容詞的な意味を表わす動詞の前にはこれらとは異なる助動詞が現れる。この助動詞も補助詞 tun をとることができるので、上に見た助動詞と同類に分類することができると考えられる。次節にその例をみていこう。

2. バンバラ語の「形容詞」の特徴

2.1 叙述に用いられる「形容詞」

バンバラ語ではヨルバ語と同様、事物の性質や状態を叙述する場合、「形容詞」は動詞と同じように主語の後ろにきて述部をなし、「主語＋自動詞」と同じ形式になる。この点において、バンバラ語の叙述に用いられる「形容詞」は動詞と同類であるといえる。ヨルバ語では形容詞的な意味を表わす自動詞も他の一般的な動詞も、アスペクトや否定の標識は同じであり、統語的な違いは見られないが、バンバラ語においては、1 節でみたような助動詞ではなく、形容詞的な動詞に特有の助動詞 ka が用いられる。ka は他の助動詞と同じように動詞の前に現れ、また補助詞 tun がつくのも同じである。下に例をみてみよう。

(14)a. cɛblen ka jan 「チェブレンは背が高い」
チェブレン Pred 高い

b. cɛblen tun ka jan 「チェブレンは背が高かった」
チェブレン Pst Pred 高い

(15)a. nin mobili ka jɛ 「この車は白い」[5)]

この 車 Pred 白い

b. nin mobili tun ka jɛ 「この車は白かった」

この 車 Pst Pred 白い

否定の助動詞は man であり ka と交替して現れる。man も補助詞 tun をとることができる。

(16)a. cɛblen man jan 「チェブレンは背が高くない」

チェブレン N.Pred 高い

b. cɛblen tun man jan 「チェブレンは背が高くなかった」

チェブレン Pst N.Pred 高い

(17)a. nin mobili man jɛ 「この車は白くない」

この 車 N.Pred 白い

b. nin mobili tun man jɛ 「この車は白くなかった」

この 車 Pst N.Pred 白い

このような助動詞 ka, man をとる形容詞的な動詞には以下のようなものがある。Dixon (2004:3-5)に示されている形容詞の意味的な分類に基づいてみてみよう[6)]。

（語例の中で（ ）に入っているのは、別の分類ですでに挙げられている語である。一つの語がいくつかの意味を表わすので、意味分類に従うために重複して挙げている。）

[5)] 指示詞 nin「この」は被修飾名詞の前後どちらにも現れ得る。本稿の例文ではどちらの場合も見られるが、前後による意味の違いはない。おそらく慣用によるものや強調の程度に違いがあると思われるが、詳細は今後の調査の課題としたい。

修飾語は被修飾名詞の後ろにくるのが普通であるが、所有者を表わす修飾語と指示詞「この」だけは名詞の前にくる。ちなみに、後置詞をもち、所有者を表わす修飾語が名詞の前にきて、他の修飾語が名詞の後ろにくるという特徴はマンデ語派を中心とする西アフリカの諸言語にみられ、アフリカにおける語順の類型の一つのタイプを形成している。この特徴をもつ言語にはＳＯＶ型だけでなく、ＳＶＯ型の言語もある（Creissels 2000:251）。

[6)] Dixon（2004:3-5）は「形容詞」が表すとされる代表的な意味について、中心的なものから周辺的なものまで 13 に分けて挙げている。**1〜4** が中心的な意味、5〜7 が周辺的な意味で、8〜13 は形容詞として表す言語もある、というものである。

1. Dimension（大きさ、広がり）

bon「大きい」、dɔgɔn「小さい」、jan「長い、高い」、surun「短い、低い」、dun「深い」

2. Age（年齢、新旧）

kɔrɔ「古い」

3. Value（価値、善悪）

ɲi「良い」、fisa「より良い」、jugu「悪い」

4. colour（色）

jɛ「白い」、fin「黒い」、bilen「赤い」

5. Physical property（物理的特徴）

girin「重い」、fiɲɛ, fɛgɛn「軽い」、suma「冷たい」、goni, kalan「熱い」、

gɛlɛn「固い」、magan「柔らかい」、go「腐っている」

（味）di「おいしい、よい」、timi「甘い、おいしい」、kuna「苦い」、kumu「酸い」、

farin「辛い」

6. Human propensity（人間の性質）

kɛnɛ「元気な、健康な」、misɛn「細い、痩せている」、kunba「太っている」、

kegun「賢い」、（farin「気の強い」）、（go「愚かな」）

7. Speed（速さ）

tɛli「速い」、（suma「遅い」）

8. Difficulty（難易）

nɔgɔn「易しい」、（gɛlɛn「難しい」）

9. Similarity（相違）

kan「同じ」

10. Qualification（質的）

—

11. Quantification（量的）

ca「多い」

12. Positional（位置、遠近）

（jan「遠い」）

13. Cardinal numbers（数）

—

叙述で用いられるこれらの語は、他の動詞と異なる助動詞 ka をとるという点をもって「形容詞」という独自のカテゴリーに分類することが可能である。助動詞 ka をとり叙述に用いられるこれらの語を、以下では「叙述形容詞」と呼ぶことにする。叙述形容詞の数はそれほど多くないが、「大きい・小さい」や「良い・悪い」など主要な意味の語は見られる。また、他の多くのアフリカ諸語に見られるように、色を表わす語は「白い、黒い、赤い」の 3 つである。「多い」に対して「少ない」を表わす語が見られないが、ヨルバ語でも同じく欠けており、「少ない」は「多い」の否定形を用いて表わす。「古い」に対して「新しい」もないが、「新しい」は修飾用法にのみ用いられる語があり、同定の構文を用いて叙述を表わす（以下、修飾に用いられる「形容詞」を「修飾形容詞」と呼ぶことにする）。「新しい」は本来、叙述形容詞であったが、もっぱら修飾に用いられる修飾形容詞になったと考えられる。以下に、叙述形容詞と関係づけながら、修飾形容詞についてみていく。

2.2 修飾に用いられる「形容詞」

修飾形容詞には、叙述形容詞に接辞-man をつけて派生させたもの、叙述形容詞と同じ形のもの、それ以外の語彙を用いるものの 3 つのタイプに分けることができる。このうち、接辞 -man をつけた形が最も一般的である。(18)に例をあげる。左が叙述形容詞、右が接辞 -man をつけた修飾形容詞の例である。

(18)
surun — surunman 「短い、低い」
jugu — juguman 「悪い」
jɛ — jɛman 「白い」
fin — finman 「黒い」
bilen — bilenman 「赤い」
girin — girinman 「重い」
kuna — kunaman 「苦い」
kɛnɛ — kɛnɛman 「元気な、健康な」
gɛlɛn — gɛlɛnman 「固い」
ca — caman 「多い」
tɛli — tɛliman 「速い」

（語句例）

mobili　jɛman　「白い車」　　wari　caman　「たくさんのお金」

車　白い　　お金　多い

下の(19)は -man の不規則な派生形の例である。母音が変化している例と、派生形にさらに語根が加わった形で語彙化しているものである。

(19)　ɲi　—　ɲuman　「良い」

di　—　duman　「おいしい、よい」

jan　—　janmanjan　「長い、高い」

（語句例）

kalanden　ɲuman　「良い学生」　　muso　janmanjan　「背の高い女」

学生　良い　　女　高い

しかし、どんな叙述形容詞からでも -man の付いた派生形が作れるわけではなく、-man の派生形をもたないものもある。次のような例である。

(20)　kɔrɔ「古い」　—　*kɔrɔman

kumu「酸い」　—　*kumuman

suma「冷たい」　—　*sumaman

(21)　bon「大きい」　—　*bonman

kan「同じ」　—　*kanman

これらの叙述形容詞に対する修飾形容詞は、叙述形容詞と同じ形である場合と、全く異なる語彙を用いる場合がある。(20)は同じ形のもの、(21)は異なる語彙を用いる。

	叙述形容詞		修飾形容詞
(20)'	kɔrɔ「古い」	—	kɔrɔ
	kumu「酸い」	—	kumu
	suma「冷たい」	—	suma

(21)'　bon「大きい」　—　belebele

　　kan「同じ」　—　kelen

(20)' の語は叙述にも修飾にも同じ形で用いられる[7]。kɔrɔ「古い」の例を以下に見てみよう。(22a)は叙述に用いられる例、(22b)は修飾に用いられる例である。

(22)a.　yiri　nin　ka　kɔrɔ　「この木は古い」

　　木　この　Pred　古い

　b.　yiri　kɔrɔ　「古い木」

　　木　古い

(21)' は叙述と修飾で異なる語を用いる例である。(23)に例をあげる。

(23)a.　so　nin　ka　bon　「この家は大きい」

　　家　この　Pred　大きい

　b.　so　belebele　「大きい家」

　　家　大きい

以上は、叙述形容詞に対して修飾形容詞がどのような形であるかという視点からみたが、逆に、修飾形容詞だけがあり、それに対する叙述形容詞がないという例がみられる。下の(24)の語例である。形態的には叙述形容詞と同類に見えるが、修飾用法でしか用いられず、助動詞 ka をとる叙述形容詞としては用いられない。

(24)　叙述形容詞　　修飾形容詞

　　なし　—　kura　「新しい」

　　なし　—　kisɛ　「勇敢な」

---

[7] 先行研究ではこれらの形容詞は同形とされているが、調査協力者のサコ氏によると、kɔrɔ「古い」のみ同形として用いられるが、後述のように、kumu「酸い」や suma「冷たい」は叙述形容詞としては用いられないとしている。おそらくそれは新しい変化であると考えられるが、文献では確認できていないので、ここでは、先行研究の記述に従って、これらの 3 つの語を同形の例としてあげておく。

Bird & Kanté（1977）では、(24)の語は叙述形容詞としても用いられると記されているが、Fonana & Traoré（2003）ではすでに修飾形容詞としての用法しかみられず、またサコ氏も修飾形容詞としての用法しか認められないとしている。つまり、これらの語はもともと(20)' の語のように、同じ語が叙述形容詞としても修飾形容詞としても用いられていたが、修飾にのみ特化していったのではないかと考えられる。(24)の「新しい」や「勇敢な」を叙述で表わす場合は、1 節の②でみた「同定」を表わす助動詞 ye ～ ye を用いて表わす。kura「新しい」を例にみてみよう。(25a)は修飾の例、(25b)は叙述の例である。

(25)a. mobili kura 「新しい車」
車 新しい

b. mobili nin ye kura ye 「この車は新しい」
車 この 同定 新しい 同定

注の 7)で述べたように、サコ氏にとっては(20)'の kumu「酸い」や suma「冷たい」も叙述形容詞としては機能せず、修飾形容詞としてのみ用いるようである。この場合、叙述には 1 節の①でみた「断定」の構文を用いる。サコ氏があげた例をあげる。(26a)は修飾の例、(26b)は叙述の例である。

(26)a. nɔnɔ kumu 「酸いミルク」
ミルク 酸い

b. nin nɔnɔ kumu-len don 「このミルクは酸い」
この ミルク 酸い-VN 断定

(26b)のような構文はどの参考文献でも確認されていないが、kumu「酸い」に動名詞化接辞の-len がついており、脱動詞化のプロセスがみられる。叙述の形式に違いは見られるが、いずれにしろ、kumu「酸い」や suma「冷たい」も (24)の kura「新しい」や kisɛ「勇敢な」と同じく、修飾形容詞にのみ特化していく傾向にあると言える。

Bird & Hutchinson & Kanté（1977）や Kastenholz（1998）、清水（1992）などの先行研究によると、接辞 -man の派生形をもつ語でも、派生させない形を修飾に用いる例がある。つまり、同形で叙述形容詞としても修飾形容詞としても機能する例はもっと多かったよう

である。たとえば、色を表わす 3 つの叙述形容詞 jɛ「白い」、fin「黒い」、bilen「赤い」に対しては -man で派生させた形の jɛman「白い」、finman「黒い」、bilenman「赤い」が修飾形容詞であり、サコ氏もこの形しか修飾形容詞には認められないとしているが、先行研究では派生させない形 jɛ、fin、bilen も修飾形容詞として用いることができるとしている。

本稿での考察では、同じ形で叙述形容詞としても修飾形容詞としても機能すると確実に言えるのは kɔrɔ「古い」のみであるが、先行研究の記述などから、本来は kɔrɔ 以外にも多くあったと考えられる。そしてそれらは、徐々にどちらかの機能に特化していったのではないかと推測される。多くは叙述形容詞としてのみ機能するようになり、それに対する修飾形容詞は -man の派生形か別の語彙を用いるようになった。それに対して、kura「新しい」のように修飾形容詞としてのみ機能するようになり、叙述では同定や断定のようなコピュラ文を用いるようになっていったという変化が考えられるのである。

3. まとめ

以上、バンバラ語の「形容詞」について見てきた。バンバラ語では叙述に用いられる「形容詞」は動詞と同じように助動詞や補助詞をとることから、動詞に分類することが可能であるが、他の動詞とは異なる独自の助動詞をとる点において、動詞の中でも別の分類を構成すると考えられる。その下位分類をここでは「叙述形容詞」と呼んだ。この点において、叙述に用いられる「形容詞」が他の動詞と同じ振る舞いをし、動詞として分類されるヨルバ語とは異なっている。

また、ヨルバ語では修飾に用いられる語は、叙述に用いられる動詞から派生される形（動名詞形）が一般的であり、それに加えて少数の異なる語彙（修飾専用の形容詞）を用いる例が見られた[8)]。バンバラ語でも同じく、叙述形容詞から派生される形（-man の派生形）と少数の異なる語彙を修飾に用いる例が一般的であった。

---

8) たとえば次のような例である。

ヨルバ語　i)a. ɛja　naa　dun　「その魚はおいしい」（叙述）
　　魚　その　おいしい（動詞）
　　b. ɛja　didun　「おいしい魚」（修飾）
　　魚　おいしい（動名詞形）
　　ii)a. ɛja　naa　tobi　「その魚は大きい」（叙述）
　　魚　その　大きい（動詞）
　　b. ɛja　nla　「大きい魚」（修飾）
　　魚　大きい（修飾専用形容詞）

しかし、おそらく本来は叙述形容詞であったと考えられるものが、修飾用法に特化している例（kura「新しい」、kisɛ「勇敢な」、kumu「酸い」、suma「冷たい」など）も見られた。修飾用法に特化した「形容詞」は「名詞」と同類であり、そのため叙述では同定や断定のコピュラ文を用いることになる（kumu-len「酸い」は動名詞化接辞がついている点で、一層「名詞化」が顕著に見られるといえよう）。

バンバラ語の「形容詞」の特異な点は、叙述に用いられるものと修飾に用いられるものが同じ形の場合があるという点である。kɔrɔ「古い」は叙述形容詞としては動詞と同類であり、修飾形容詞としては名詞と同類にとらえることができるが、それでは kɔrɔ の本質的な特質はどちらであろうか。日本語の「古い」が叙述にも修飾にも同じ形で用いられることと並行的にとらえれば、動詞でも名詞でもない独自の「形容詞」というカテゴリーをたてることは可能であろう。「はじめに」で述べたように、アフリカ諸語においては形容詞というカテゴリーは認められにくく、一般的には動詞や名詞に分類される語が「形容詞」として用いられると言われているが、バンバラ語には独自の「形容詞」というカテゴリーを認めることができると結論づけられる。

しかし、バンバラ語の「形容詞」は叙述か修飾のどちらかに特化しつつあり、その変化は進行中のようである。つまり、「形容詞」が動詞的な語か名詞的な語に分かれようとする変化が進行しているということである。この変化がバンバラ語においてどれほど一般的なものであり、また、どのような語が動詞として、あるいは名詞としての特質を強めていくのかなどについては、今後さらに調査、研究をすすめていかなければならない。

＊ 本稿は 2013 年度科学研究費補助金　基盤研究(C)「ニジェール・コンゴ語族における動詞構造と統語に関する類型論的研究」（課題番号 25370477、研究代表者 小森淳子）による研究の成果の一部である。

参考文献

Bird, Charles & Mamadou Kanté. 1977. *Bambara - English, English - Bambara Student Lexicon,* Indiana University Linguistics Club.

Bird, Charles & John Hutchinson, Mamadou Kanté. 1977. *An Ka Bamanankan Kalan: Introductory Bambara*, Indiana University Linguistics Club.

Creissels, Denis. 2000. “Ch.9 Typology”, in Heine, Bernd & Derek Nurse(eds.) *African*

Languages: An Introduction, Cambridge University Press, pp.231-258.

Dixon, R.M.W. 2004. “Adjective Classes in Typological Perspective,” in Dixon, R.M.W. & Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective Classes - A Cross-Linguistic Typology*, New York: Oxford University Press, pp.1-49.

Fonana, Amadou Tidiane & Mamery Traoré. 2003. *Bamanankan Learners' Reference Grammar*, National African Language Resource Center, University of Wisconsin- Madison, Global Academic Publishing.

Kastenholz, Raimund. 1998. *Grundkurs Bambara (Manding) mit Texten*, Köln: R.Köppe.

Schadeberg, Thilo C. 2003. “Derivation (Ch.5), Historical Linguistics (Ch.9)”, in Nurse, Derek & Gerard Philippson(eds.) *The Bantu Languages*, London: Routledge, pp.71-89, 143-163.

小森淳子. 2012. 「アフリカ諸語における「形容詞」について―ヨルバ語とバントゥ諸語を例に―」『スワヒリ＆アフリカ研究』23，167-185.

清水紀佳. 1988. 「アフリカの諸言語」『言語学大辞典』第 1 巻、東京：三省堂、pp.237-439.

————. 1992. 「マンデ語」『言語学大辞典』第 3 巻、東京：三省堂，pp.217-230.

松本克己. 2006. 「第 15 章　形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」『世界言語への視座－歴史言語学と言語類型論』、東京：三省堂，pp.313-320.